



Title	平安朝漢詩における「蚕」語群の詠法：「織」・「怨」との組合せに着目して
Author(s)	小山, 愛桂
Citation	詞林. 2025, 78, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102894
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平安朝漢詩における「蜚」語群の詠法

——「織」・「怨」との組合せに着目して——

小山 愛桂

一、問題の所在

「蜚（^①蜚）」「蟋蟀」「促織」「絡緯」「蜻蛉」（以下「蜚」語群）と総称する）は、中国では地域・時代による同物異名とされたが、『和名類聚抄』以降の日本の古辞書は、異なる和訓をあて別項で掲出する。

促織 兼名苑云、絡緯、一名促織。〈波太於利米。〉鳴聲如^レ急^レ織^レ機、故以名^レ之。

蜻蛉 文字集略云、蜻蛉。〈精列二音。古保呂伎。〉

蟋蟀 兼名苑云、蟋蟀（悉率二音）、一名蜚。〈渠容反、又音拱、岐利々々須。〉

（和名類聚抄卷八・蟲多部）

このような分類に基づき、先行論は各語の指す虫の実態を検討してきた。一方、表現上の特徴にはあまり目が向けられていない。現在知られている詠法としては、

①鳴き声の特徴から「機織り」とともに詠まれること

②物悲しい声が詠まれること

がある。いずれも中国漢詩文と日本漢詩、和歌に共通し、中国の影響が指摘される。だが、日中の漢詩と和歌を詳細に比較した論考はほぼ見当たらない。本稿は、平安朝漢詩における「蜚」語群の詠法①②を、六朝・唐詩、および平安期の和歌の傾向と比較する。三者を区別し、共通と差異の様相を提示することで、日本漢詩が中国漢詩文の用法をどのように受容したのか、また和歌の詠法とどう重なるのか、という問題を考える一助としたい。

二、「織る」主体―中国漢詩との比較

まず、「蜚」語群と「織」の結びつきの典拠を確認する。『文選』卷十九「古詩十九首」其七の「促織」に対する李善注は、次のように『春秋考異郵』および宋均注を引く。

古詩十九首 其七

明月皓夜光 明月は皓く夜光り

促織鳴東壁 促織は東壁に鳴く

〔春秋考異郵曰、立秋趣織鳴。宋均曰、趣織、蟋蟀也。〕

立秋女功急、故趣之。礼記曰、季夏蟋蟀在壁。〕

〔春秋考異郵に曰く、立秋に趣織鳴く。宋均曰く、趣織は、

蟋蟀なり。立秋に女功急く、故に之を趣す。礼記に曰く、

季夏にして蟋蟀壁に在り。〕

（文選卷二十九・雜詩上〔李善注〕）

「促織」と「趣織」を同義とみなしたうえで、機織りを促す
というところから付けられた呼称だと説明する。また、『藝
文類聚』の「蟋蟀」の項には、

詩義疏曰、蟋蟀似蝗而小、正黑。目有光澤、如漆。有角
翅。幽州人謂之趣織、督促之言也。里語趣織鳴、嬾婦驚。

詩義疏曰く、蟋蟀は蝗に似て小さく、正に黒し。目に光
沢有ること、漆のごとし。角・翅有り。幽州の人之を趣
織と謂ふ、督促の言なり。里語に趣織鳴きて、嬾婦驚く
と。

（藝文類聚卷九十七・蟲多部）

とあり、蟋蟀が趣織とも呼ばれ、その意は督促であり、「趣
織が鳴いて怠け者の女がはつとする」という俗諺があること
が記されている。このように、「促織」や「蟋蟀」は、機織
りを始める秋の初めに鳴き、機織りを急かす虫とされた。

この発想を受け、六朝・唐詩は「蜚」語群と「織」を次の
ように詠む。

擬古

南朝宋 鮑照

秋蛩挾戸吟 秋の蛩は戸を挟みて吟じ

寒婦成夜織 寒婦は夜織ることを成す

題「長安主人壁」

（玉台新詠卷四）
盛唐 孟浩然

促織驚寒女 促織は寒女を驚かし

秋風感長年 秋風は長年を感じしむ

（孟浩然集卷中）

鮑照は「虫が鳴き、女が機を織る」、孟浩然是「促織が鳴い
て女をはつとさせる」といい、いずれも「織る」のは人であ
る。虫を「織る」主体とする例は数少なく、古くは

奉和賜曹美人

北周 庾信

絡緯無機織 絡緯は機無くして織り

流螢帶火寒 流螢は火を帯びて寒し

（庾子山集）

に「絡緯は機織り機をもたないのに織り、螢は火を帯びてい
るのに寒い」とある。また、唐代では

寓意詩五首 其三

白居易

促織不成章 促織は章を成さず

提壺但聞聲 提壺は但だ声を聞くのみ

嗟哉蟲與鳥 ああ虫と鳥と

無實有虛名 実無くして虚名有り

（白氏文集卷二・0092¹²）

古楽府雜怨三首 其三

中唐 孟郊

暗蛩有虚織 暗蛩 虚しく織ること有り
短線無長縫 短線 長く縫ふこと無し

（孟郊集卷一・楽府上）¹³

がある。ただし、これらは「虚名」「虚織」、つまり実際には機を織らないという。このような留保なしに虫が「織る」という例は唐以前にはきわめて稀で、

冬夕

寒蛩獨罷織 寒蛩 独り織ることを罷め

中唐 張籍

湘雁猶能鳴 湘雁 猶ほ能く鳴く

（文苑英華卷一五八）¹⁵

がみられる程度である。¹⁶

一方、平安朝漢詩で「葦」語群と「織る」を結びつける例は五首挙げられる。

① 賦得「絡緯無機」¹⁷（応制一首）

菅原清公

歲暮倡樓冷 歲暮の倡樓 冷ややかにして

征夫消息希 征夫の消息は希なり

思蟲寧有憶 思蟲 寧ぞ憶有らむや

誰為織寒衣 誰が為にか寒衣を織る

細緯元無杼 細緯 元より杼なく

疎経不待機 疎経 機を待たず

正成如可借 正成りて如し借るべくは

遠送寄金微 遠く送りて金微に寄せむ

② 賦得「秋織」

（文華秀麗集卷下・雜詠・136）¹⁷

島田忠臣

促織寒声愁不支 促織の寒声 愁へを支へず

携將機杼景將移 機杼を携將へて 景將に移らむとす

香飛兩袖隨梭乱 香は兩袖より飛び 梭に随ひて乱れ

汗濕双題逐縷垂 汗は双題を濕し 縷を逐ひて垂る

幅閉尋常依土俗 幅閉づるは 尋常土俗に依る

衣成早晚寄天涯 衣成らば 早晚天涯に寄せむ

含情廻出相思字 情を含みて廻り出づる 相思の字

無限秋風繞腕吹 限り無き秋風 腕を繞りて吹く

（田氏家集卷上・8）¹⁸

源順

③ 葦声入夜催（以寒為韻）

掛声切々夜漫々 掛声切々として 夜漫々たり

欵枕還忘玉漏闌 枕を欵てて還た忘る 玉漏の闌なるを

不奈蟬帖喧岸柳 奈むともせず 蟬帖の岸柳に喧しきを

可憐絡緯織庭蘭 可憐むべし 絡緯の庭蘭に織るを

叢辺怨遠風聞暗 叢辺の怨遠くして 風の聞え暗く

壁底吟幽月色寒 壁底の吟幽かにして 月の色寒し

傾耳誰無秋興動 耳を傾くるに誰か秋興を動かすこと無

昔鳴軒屏感潘安 昔 軒屏に鳴きて潘安を感じしむ

（天徳三年八月十六日闕詩行事第六・左）²¹

④ 同題

橘直幹

蜚喧暮草夜更闌 蜚は暮草に喧しく 夜 更に闌け
 月影初斜露色団 月影初めて斜き 露の色団かなり
 山館雨時鳴自暗 山館に雨ふる時 鳴くこと自ら暗く
 野亭風処織猶寒 野亭に風ふく処 織ること猶ほ寒し
 林辺響遠秋心急 林辺に響き遠り 秋の心急にして
 枕上声余曉夢殘 枕上に声余り 曉の夢残り
 德及昆虫微細類 德は昆虫微細の類に及び
 □□得令出叢端 □□叢端より出さしむるを得たり

⑤ 入夜有「虫声」〈心〉（天徳三年八月十六日關詩行事第六・右）
 藤原忠通

鐘声滿耳感難禁 鐘声耳に満ちて 感禁じ難し
 入夜愁人動寸心 夜に入りて 愁人寸心を動かす
 臥聽孤床鳴自近 臥して孤床に聴けば 鳴くこと自ら近
 起依暗壁織猶深 起ちて暗壁に依れば 織ること猶ほ深

先当新月雖添響 先ず新月に当りて 響きを添ふると雖も
 終到明朝定罷音 終に明朝に到りて 定めて音罷む
 蟋蟀韻寒腸已斷 蟋蟀の韻寒く 腸は已に断へ
 箇中移座苦相尋 箇中に座を移し 苦だ相尋ぬ
 （法性寺関白御集）

①の題に「絡緯無機」つまり「絡緯は（機織りを連想させる

名に反し）織機をもたない」というのは、前掲の庾信詩一句目に同じで、白居易「寓意詩五首」の「促織不成章」にも通じる。また、②は「秋の機織り」を題に、まず「織ることを促す」という名の秋の虫「促織」を詠み、字義を活かして「機を織る女」の描写につなげる。両者とも、「機織り」の意味により「促織」「絡緯」と機を織る女性を関連づけ詠む点で、六朝・唐詩の詠み方を継承する。一方、③④⑤は、いずれも虫の「声」を題とし、虫が鳴くことを「織る」と言い換える。「鳴く」の比喩としての「織る」の主体は「蜚」語群であり、「虚織」のような留保もない。これは、中国漢詩文にみえる「虫が鳴き、女が織る」の趣向とは離れた表現だ。「蜚」語群と「織」を組み合わせる平安朝漢詩の数は限られるものの、五首のうち三首が虫を「織る」主体としており、一般に人を主体とする中国漢詩とは傾向を異にしている。

三、「織る」主体—和歌との比較

和歌における類似表現として「はたおり（はたおる虫）」と「つづりさせ」（「きりぎりす」の鳴き声の聴きなし）がある。「促織」の訓である「はたおり（め）」は「はたおる虫」とも呼ばれ、文字通り「機を織る虫」として詠まれる。また、「蜚」「蟋蟀」の訓である「きりぎりす」も、鳴き声を「つづりさせ」と聴きなし、裁縫のイメージが付与される。「はたおり」「つづりさせ」の語や「虫が機を織る」という詠み方

は『万葉集』にはみえず、十世紀初め頃から確認できる。このことから、十世紀以降の和歌で「はたおり」「つづりさせ」が詠まれることは、漢詩で「蚕」語群と「織」が組み合わせられることと強い連関があると考えられる。

以下、和歌と平安朝漢詩の詠法を比較する。まず、先にみた行為の主体という点に着目する。

「つづりさせ」の例として『家持集』に次の歌がみえる。

からころもたつたの山にあやしきもつづりさせてふきり
ぎりすかな

（家持集・雑歌・253）

「唐衣のように紅葉した竜田山できりぎりすが『綴り刺せ』と鳴く」のを「あやし」とし、すでに「ころも」があるのに「裁縫せよ」と鳴くことへの不審を述べる。次に、「はたおりめ」の例を挙げる。

はたおりめ

かりがねのは風をさむみはたおりめくだまくこゑのきり
きりとなく

（古今和歌六帖第六・401）

ここでは「雁の羽風が寒いので、はたおりめが糸を管に巻く（ような）声がりきりとする」という。「糸を管に巻く」というのが機織りを示し、「はたおりめ」が寒さを免れるため糸を巻いて衣を織ると詠まれている。また、「つづりさせ」と「はたおり」の両方を詠みこむ歌では、

うちはへてはたおる虫のあるものをつづりさせてふ声や
なになり

（賀茂保憲女集・冬・106）

「ずっと機を織っている虫がいるのに『綴り刺せ』という声が聞こえるのはどうしたのか」という。これらの例から、「つづりさせ」は「裁縫を促す声」、「はたおり」は「機を織る虫」として詠まれたことがわかる。

『新編国歌大観』所収の平安期に成立した集において、「つづりさせ」を含む歌は五首、「はたおり」「はたおる虫」を含む歌は二十七首（うち「機織り」の意味を利用していると判断できる歌は二十三首）（重複を除く）で、明らかに「はたおり（はたおる虫）」の方が多く詠まれている。つまり、和歌では、六朝・唐詩に一般的な「虫が鳴き、人が織る」表現に近い「つづりさせ」と、平安朝漢詩に特徴的な「虫が織る」表現に近い「はたおり」がいずれも詠まれたものの、後者の方が優勢となっている。したがって、「織る」主体という観点でみれば、平安朝漢詩と和歌は近い位置にあるといえる。

四、名への意識―和歌との比較

前章において、平安朝漢詩と和歌は「織る」主体が「蚕」語群である点において、ともに中国の漢詩文から離れた傾向をもつことを述べた。本節では、「蚕」語群を「織る」主体とする平安朝漢詩と和歌の間にも、「織る」の詠み方に差異

があることを示す。注目するのは、音の比喩として「織」の語を用いるか、「はたおり」という名を重視するかという点だ。

そもそも「蚕」語群が「織る」と詠まれるのは、鳴き声が織機に似ることに由来するため、「織」という語は基本的に鳴き声の比喩である。前章④の「野亭風処織猶寒」は、「機織りの音のような鳴き声が寒々しい」といい、「織」は聴きとつた音の比喩だ。③も「不奈蟋蟀喧岸柳、可憐絳緯織庭蘭」と「喧し」「織る」を対とし、「柳の辺りで喧しく鳴いている」「庭蘭の辺りで織機のような声で鳴いている」という。⑤も同様に「有虫声」とあるように、聴覚で感受した事柄を並べる。一方、和歌には、行為としての「機を織る」という意味を利用した修辭が少なくない。例えば次の三首である。

屏風に

紀貫之

秋くればはたおる虫のあるなへに唐錦にも見ゆるのべかな

（拾遺集卷三・秋・180）

はたおりといふむしをよめる

ささがにのいとひきかくる草むらにはたおる虫のこゑきこゆなり

（金葉集二度本卷三・秋・219）

月前聞虫

めもあやに見ゆるこよひの月影にはたおりそふる虫の声かな

（清輔集・秋・164）

拾遺集180番歌は、色づいた野辺を「唐錦」にたとえ、その錦を「はたおる虫」の作品に見立てる。また、金葉集219番歌は「蜘蛛が糸を引き懸ける草叢で、はたおる虫は機を織る虫の聲がしている」、清輔集164番歌は「目もあやに見える月、その綾にさらに布を織り添える虫の聲」と詠む。これらは、「はたおる虫」が「織る」とともに「野辺」が「錦」のようにみえる、「糸」から布を「織る」、「綾」があるところに布を「織り」加える、というように語同士を関連づけ、秋の情景を布に関する文脈の中にまとめている。

これらの歌において、「はたおり（はたおる虫）」という名称は不可欠だ。この三首は、「おる」という語が「錦」「糸」「あや」という他の語と意味の連関をもつことによって成立する。仮に「はたおる虫」を「鳴く虫」と言い換えれば、縁語により構成されていた意味のまとまりは失われる。つまり、これらの和歌は「はたおる」という名に重きを置くのであり、「機織る」虫だからこそ成り立つ。一方、漢詩③④⑤の「織」は「鳴」の言い換えに留まり、「織」を「鳴」や別の比喩に置き換えたとしても詩全体は成立する。和歌のように他の語と連関して意味のまとまりを形成しているわけではないからだ。これらの漢詩における「織」は鳴き声の比喩であり、和歌の「はたおり」のように虫の名を強く意識する表現とは異なる。

また、漢詩が「促織」「絡緯」だけでなく「蜚」「蟋蟀」も「織る」と詠むのに対し、和歌で虫が「織る」という場合は専ら「はたおり」が詠まれ、「きりぎりす」が「織る」という例は見当たらない。前者は鳴き声の比喩なので、字義が「機織り」と関わらない「蜚」「蟋蟀」でも支障はないが、後者は「機織り」という意味を用いて各語を関連づけることで成立するため、「はたおり」の名が重要となると考えられる。このように、和歌は「はたおり」の名を利用して「機織り」に關係する文脈を形成するのに対し、平安朝漢詩は「蜚」語群が「織るような声で鳴く」と聴きなすのみで、和歌に比べて名への意識は薄い。

五、「怨」の主体—中国詩との比較

次に、悲しみや愁いを表す「怨」の語と「蜚」語群の組合せに着目し、心情の主体、また焦点が人事と自然のいずれにあるかという観点で日中の漢詩を比較する。「蜚」語群の鳴き声が聴く者の愁いや悲しさをかきたてるという表現は日中ともにみられるが、平安朝漢詩には「蜚」語群自体が露や霜の寒さを「怨」み鳴くという表現もある。該当する四首の用例を挙げる。

⑥重陽夜感^①寒蜚^②、応制

菅原道真

欲將虫泣斷人腸 虫の泣くを將て 人の腸を斷たむとす
殊感秋深不免霜 殊に感ずらくは 秋深くして霜を免れ

ざるを

今夜何因寒怨急 今夜 何に因りてか寒怨急なる
被多折菊草棲荒 多く菊を折られて 草棲荒れたり

（菅家文章^③ 371）

⑦草木凝^④秋色^⑤

大江朝綱

露草月侵蜚怨苦 露草 月侵して 蜚の怨み苦だしく
煙枝嵐引鳥棲艱 煙枝 嵐引きて 鳥の棲むこと難し
荻花漫乱三秋雪 荻花 漫ろに乱れ 三秋の雪たり
桂葉偷燒九葉丹 桂葉 偷かに燒き 九葉の丹たり

（類聚句題抄^⑥ 32）

⑧花菊感^⑦傲秋^⑧

菅原庶幾

花成五美人催思 花は五美と成りて 人 思ひを催し
色動兼金客斷腸 色は兼金を動かし 客 腸を斷つ
盈把折時寒蜚怨 把に盈し折る時 寒蜚怨む
泛盃吹処晚風涼 盃に泛べ吹く処に 晚風涼し

（類聚句題抄^⑨ 108）

⑨山寺即事

藤原茂明

古寺蕭条僻俗賈 古寺 蕭条として俗賈を僻り
巖路高低引友攀 巖路の高低 友を引きて攀づ
苔地露寒蜚怨切 苔地に露寒く 蜚の怨み切にして
松門日落鶴眠閑 松門に日落ちて 鶴の眠り閑かなり
声来曉枕洗夢水 声は曉枕に来たる 夢を洗ふ水
影入晚窗当眼山 影は晚窓に入る 眼に当たる山

洞裏優遊雲莫厭 洞裏に優遊す 雲厭ふこと莫れ
 被牽詩興未能還 詩興に牽かれ 未だ還ること能はず

（本朝無題詩卷十・雑寺・728³⁴）

⑦⑨は蜚が草地の寒さを「怨」むといい、⑥⑧は菊花を折られたことで寒さから身を覆うものを失ったという経緯を加える。これらの作品には、蜚の心情としての「怨」の語の使用が共通する。「怨」の訳語は、悲しい、寂しい、うらみに思う等と幅があるが、基本的に何らかの願望が満たされない状態により引き起こされる心情をいい、希望が実現されない原因となつてゐるものを咎める気持ち「うらみ」となる。³⁵ここでは、虫が寒くならないよう望んでゐるにもかかわらず、寒さが厳しさを増し、過ごしやすい環境が得られないことで「怨」が生じる。寒さの原因、つまり「怨む」対象は、⑦⑨では露、⑥⑧では重陽の行事で菊が折られたこと、あるいは折った人ということになる。

ここで、「蜚」語群と「怨」を組み合わせる六朝・唐の用例を確認すると、次の二首がみられる。

宛轉歌

梁 江總

不怨前階促織鳴 前階に促織の鳴くを怨みず
 偏愁別路擣衣聲 偏へに別路に衣を擣つ声を愁ふ
 別燕差池自有返 別燕 差池して自ら返ること有り
 離蟬寂寞詎含情 離蟬 寂寞として詎ぞ情を含まむ

（樂府詩集卷六十）³⁶

秋蛩

中唐 雍裕之

雨絕蒼苔地 雨は絶ゆ 蒼苔の地
 月斜青草階 月は斜^{かたが}く 青草の階
 蛩鳴誰不怨 蛩鳴くとき 誰か怨みざらむ
 況是正離懷 況や是れ 正に離懷なり

（全唐詩卷四百七十二）³⁷

江總は「前の階の促織が鳴く声を怨みはしない、ただ別れ路に響く砧を打つ音に愁いを覚える」という。促織は物悲しい声で鳴くという共通認識があるが、ここではあえて促織の声を「怨」みはしないといい、自分の満たされない心情の原因として促織を咎めるわけにはいかない、つまり自身の悲しみは促織の声ではなく別離によるのだという。また、雍裕之は「蛩が鳴くとき誰が怨みを感じないだろうか、ましてやこれはまさに別れに際して抱く情なのだ」という。蜚の鳴き声を聴くと人は悲しい気持ちで物思いをするものだが、今は別離の時であるから悲しみはいっそうまさるということだ。ここでの「怨」は心ならず別れてゆくことへの悲しみや満たされないさを指す。これらの詩の「怨」は人の心情で、「促織」「蛩」は人の「怨」を呼び起こす、あるいは強めるきっかけである。このように、平安朝漢詩四首では「蜚」語群自体に心情が想定されるのに対し、六朝・唐詩では「蜚」語群が人の心情をかき立てるとされる。

虫を「怨」の主体とする六朝・唐詩は稀だが、白居易が「虫

「怨」の語を用いた例が三例ある。ただ、

同「諸客」題「于家公主舊宅」

白居易

平陽舊宅少人遊

平陽の旧宅 人遊ぶこと少なし

應是遊人到即愁

応に是れ 遊ぶ人即ち愁ひに到る

春穀鳥啼桃李院

春穀鳥は桃李院に啼き

絡絲蟲怨鳳凰樓

絡糸虫は鳳凰樓に怨む

（白氏文集卷六十四・3098）

の句は、「遊ぶ人即ち愁ひに到る」つまり亡き公主の家に来る人はみな悲しむという文脈であり、鳥や虫は人の悲しみ・哀悼の意を投影されたと考えられる。また、次の例では

秋寄「微之」十二韻

白居易

影漏衰桐樹

影は漏る 衰桐の樹

香凋晚蕙叢

香は凋る 晩蕙の叢

飢啼春谷鳥

飢へて啼く春谷鳥

寒怨絡絲蟲

寒くして怨む絡糸虫

（白氏文集卷五十四・2427）

と、「寒くて虫が怨む」というものの、この詩自体が江州左遷中の作で、全体が老いや不遇を嘆いており、前の二句も植物が勢いを失う様子を描いている。そのため、寂しげな秋の風景に自身の心情を重ねたと解せられる。この二首は、人事・人の心情とかかわって詠まれている。日本の例も、⑥に「欲将虫泣断人腸」とあるように人の心情を詠みはするものの、個別具体的な人事に伴う心情ではなく、あくまで虫の声を含

む秋の情景に誘われた心情である。これらの白詩は「蜚」語群を、人の死や左遷のような具体的な人事の周辺に配置し、人事に伴う人の心情を託している。一方、平安朝漢詩は、「怨」を起こすような人側の事情は特に示さず、「蜚」語群の悲しげな声を聴いて露の寒さを「怨」んでいるのだと想像する。この点で、平安朝漢詩の詠法は白詩とも隔たりがある。また、もう一首は

八月三日夜作

白居易

燭凝臨曉影 燭は凝る 曉に臨む影

蟲怨欲寒聲 虫は怨む 寒からむとする声

（白氏文集卷六十六・3278）

と特に人事が示されないものの、「怨」を引き起こす寒さの原因（露など）も描かれていない。平安朝漢詩では四首いずれも「露が降りた」「重陽の行事で菊をとられた」という原因に言及する。これは白詩を含む唐詩にはみえない。

このように、「蜚」語群が「寒さ」ゆえに「怨」み鳴くという平安朝漢詩の表現は、六朝・唐詩の「蜚」語群と「怨」の詠法とは離れている。「蜚」語群と「怨」を詠む例は中国にもあるが、それらの「怨」は虫の鳴き声に惹起される人の心情であり、「蜚」語群の心情ではない。白詩の「虫怨」からは影響が考えられるが、白詩の三首中二首で「怨」が人の心情を仮託されているのに対し、平安朝漢詩は特に人事を示さず、寒さという自然の事情と虫の心情の想像に焦点を当て

る。加えて、平安朝漢詩は露など寒さの原因となる物事を示す点でも白詩とは隔たりがある。

六、心情の明示—和歌との比較

ここでは、和歌において「きりぎりす」が寒さゆえに鳴くという表現、また「きりぎりす」の心情についてみていく。⁽³⁹⁾ 今回の調査では、寒さ・寒さにより引き起こされる虫の心情・その表明としての「なく」という行動、という三要素を明確に示す例はみえなかった。「きりぎりす」が風などの寒さゆえに「なく」ことを詠み、寒さに対する感情は明示しない歌が数首、また「なく」という行動を詠まず、風と心情のみを詠む歌が一首みられた。

まずは「きりぎりす」が「なく」と「寒さ」をともに詠む和歌を確認する。『万葉集』⁽⁴⁰⁾には次の歌があるが、

詠「蟋蟀」

秋風之 寒吹奈倍 吾屋前之 浅茅之本尔 蟋蟀鳴毛
あきかぜのさむくふくなへわがやどのあさぢがもとにき
りぎりすなくも

（卷十・秋雜・2158）

これは「寒い秋風が吹くとともにきりぎりすの声が聞こえる」ことをいい、秋風の寒さゆえにきりぎりすが鳴く、という因果関係は明確でない。寒さを鳴く理由として示す詠み方は『古今集』の頃からみられ始める。⁽⁴¹⁾

やまがきの木

詠み人しらす

秋はきぬいまやまがきのきりぎりすよなよなな風のさむさに

（古今集・物名・432）

山がきのき

つゆさむみよるやまがきのきりぎりすこゑふりたててなきまざるらん

（忠岑集・72）

蟋蟀 左

ゆふさればこゑふりたててきりぎりすつゆをさむみやよ
もすがらなく

（保明親王帶刀陣歌合・3）

これらの歌は「きりぎりす」が「風の寒さに」また「露を寒み」鳴くといい、露や風による寒さを「きりぎりす」の鳴く原因とする。日本の漢詩と和歌では、ともに十世紀初頭頃から「蜚」語群および「きりぎりす」が露などの寒さを理由に鳴くという詠み方が現れたことになる。

「きりぎりす」と「風」および心情を詠みこむ歌は、次の一首がある。

きりぎりす

素性

秋かぜのややふきしげばきりぎりすうくもよもぎの宿を
かるるか

（古今和歌六帖・虫・3991）

「秋風がだんだん強くしきりに吹いてきたのできりぎりすが
つらくも蓬の宿を借りる」と解せられる。⁽⁴³⁾

ここまで、露や風の寒さと「なく」行動をとともに詠む歌を
みたが、「きりぎりす」に心情を想定する歌自体は他にもみ
られる。早い例としては、

寄^レ蟋

蟋蟀之 待^レ歎 秋夜乎 寐^レ驗無 枕与吾者

きりぎりすまちよろこべるあきのよをぬるしるしなしま
くらとわれは

（万葉集卷十・秋相聞・2264）

がある。「きりぎりすが待ちに待って歎び迎える秋の夜だが、
枕と私とは寝る甲斐もない」の意で、「われ」と対照的に秋
の夜を喜ぶ「きりぎりす」が描かれる。⁽⁴⁴⁾

『古今集』以降、「きりぎりす」の心情は秋の物思いと結び
つけられ、「きりぎりす」が秋に物思いをして「なく」と詠
む歌がみられる。

人のもとにまかれりける夜、きりぎりすのなきける
をききてよめる 藤原忠房

きりぎりすいたくなきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまさ
れる

（古今集卷上・秋四・196）

題しらす

紀貫之

わがごとく物やかなしききりぎりす草のやどりにこゑた

えずなく

（後撰集卷五・秋上・258）

後撰集258番歌で用いられる「かなし」は、前掲素性歌の「憂
し」同様、「怨」と近い心情といえる。ただし、これらの歌
では「我ぞまされる」「わがごとく」のように心情を自身と
比し、「我」の物思いを述べるために「きりぎりす」を引き
合いに出している。対して素性歌は「風の寒さがつらい」と
人の物思いとは関係なく虫の状況に則した心情を想像してお
り、これらの歌よりもむしろ平安朝漢詩の「怨」に近い。

以上みたように、「きりぎりす」が風や露の「寒さ」ゆえ
に鳴くという表現は、平安朝漢詩とほぼ同じ十世紀初め頃か
らみられる。また、風の寒さをつらく思うという心情や、秋
の物思いを「きりぎりす」に想定する詠み方もみられた。し
かし、漢詩にあった、風・露などの寒さ、虫の心情、「なく」
という行動の三要素をすべて備える和歌はみられなかった。

七、結論

平安朝漢詩は、「蛭」語群を「機織り」と結びつける詠法
を中国漢詩文から摂取するが、中国では一般に人を「織る」
主体とするのに対し、日本では虫を主体とする詩の方が多数
を占める。この点は「蛭」語群と「織」の組合せの受容上特
徴的だ。和歌における類似の表現としては「つづりさせ」と
「はたおり」が挙げられるが、虫を「織る」主体とする後者

の表現が優勢である。このことは、和歌が六朝・唐詩と比べて平安朝漢詩に近い傾向をもつことを示す。一方、「虫が織る」とする日本の作品の中でも、漢詩ではほぼ鳴き声の比喩として「鳴」を「織」と言い換える一方、和歌では「衣」関係の他の語と関連づけることで、「はたおり」の名がもつ「機織り」の意味を修辭に用いるという違いがある。

また、「蜚」語群の声が「怨」という心情と結びつくのも日中の漢詩に共通だが、中国では一般に「蜚」語群の鳴き声を聞いた人が悲しみを覚えるとするのに対し、平安朝漢詩では虫自身が露の寒さを「怨む」と詠まれた。この詠法には白詩の「虫怨」の影響が考えられるが、個別の人事・人の心情との関係、「怨」の原因の描出において白詩とも隔たりがみられる。露などの寒さが原因で虫が「なく」という表現は和歌と共通するが、和歌では寒さに対する虫の心情を明示しないという違いがある。

「蜚」語群を扱う先行研究は数例あるが、日中・和漢の用例を区別し詠法を比較する論はほぼなかった。「蜚」語群と「織」、物悲しい心情との組合せはすでに知られているが、いずれも中国漢詩文の用法を受けて平安朝漢詩でも同様に詠まれ、和歌にも取り入れられたという説明に留まり、詠法に差異のあることは言及されていない。本稿では、中国の漢詩・日本の漢詩・和歌を区別し、日本と中国・日本の漢詩と和歌という二軸で比較検討を行った。その結果、従来中国の影響

として説明されてきた「蜚」語群と「織」の組合せや「怨」で示されるような物悲しさとの組合せが、単に中国漢詩から平安朝漢詩、和歌へと直線的に移動したのではなく、それぞれ独自の傾向を帯びて展開していることを示すことができた。本稿で指摘した差異はあくまで「蜚」語群の詠法における違いであり、一般化には慎重さが求められるが、平安朝漢詩と中国漢詩文・和歌の関係をとらえるには、これらの差異を一般化し意味づける必要があるだろう。その点を今後の課題としたい。

【注】

(1) 謝惠連「擣衣」(『文選』)にある「莎雞」の語に対し、李善注は『毛詩』国風／幽風の「七月」および『古今注』の記述を引き、「促織、絡緯、蟋蟀」が同物異名であると示す。

擣衣 南朝宋 謝惠連

蕭蕭莎雞羽 蕭蕭として莎雞は羽ばたき

烈烈寒蛩啼 烈烈として寒蛩は啼く

《毛詩》曰、六月莎雞振羽。一名促織、一名絡緯、一名蟋蟀。(後略)

《毛詩》に曰く、六月に莎雞羽を振る。一名促織、一名絡緯、一名蟋蟀。(後略)

名蟋蟀。(後略)

(『文選』卷三十／雜詩下(李善注))

なお、傍線部「一名促織、一名絡緯、一名蟋蟀」に類する記述は『詩義疏』にはみあたらない。小尾郊一／富永一登／衣川賢次『文

選李善注引書攷證上卷」（研文出版、一九九〇年）はこの箇所に
ついて、「案一名促織上集注本有崔豹古今注曰沙鷄八字而無一名
蟋蟀四字（案するに、「一名促織」の上、集注本に「崔豹古今注
曰く沙鷄」の八字あれども、「一名蟋蟀」の四字無し）」（366頁）
という。実際に、『古今注』には「沙鷄、一名促織、一名絡緯、
一名蟋蟀」（古今注／鳥獸第四）の記述がある（『古今注』崔豹撰
『百部叢書集成』（藝文印書館、一九六六年）。したがって、こ
では集注本に依り『古今注』からの引用とした。

また、『藝文類聚』の「蟋蟀」の項は「蜻蛉、蜚とも呼ぶ」と
いう。

爾雅曰、蟋蟀、蜚也。方言曰、楚謂蜻蛉為蟋蟀、或謂之蜚。南
楚之王孫、即趣織也。

爾雅に曰く、蟋蟀は、蜚なり。方言に曰く、楚に蜻蛉を謂ひて
蟋蟀と為し、或ひは之を蜚と謂ふ。南楚の王孫、即ち趣織なり。

（藝文類聚卷九十七／蟲多部）

（2）澤瀉久孝編『狩谷校齋 箋注倭名類聚抄』（全國書房、一九
四三年）

（3）山口佳紀『「万葉集」における「蟋蟀」の訓義——「こほろぎ」
「きりぎりす」「はたおりめ」考』（芳賀紀雄監修、鉄野昌弘／
奥村和美編『万葉集研究』塙書房、第39集、二〇一九年）など、
先行研究の多くはこれらの語を主に『万葉集』における「蟋蟀」
のよみを確定させる目的で議論してきた。

（4）柳澤良一「きりぎりす考—虫の文学史の試み」（『国語と国文
学』74巻11号、一九九七年）は「蜚」語群および対応する和語群
の用例を包括的に検討し、そのなかで「促織」「絡緯」は、その
鳴き声が機を織るかんだかく悲しげな音であるところから付けら

れた名前であり、しかもその詠まれ方は、蟋蟀や蜚など、今日の
コオロギ、すなわち古典に出てくる「きりぎりす」に限りなく近
いことがわかる。（21頁下段—22頁上段）とまとめている。ただ
し主眼を虫の実態と名称の対応関係に置きたため、日唐／和漢の用
例を一括で扱い、その差異には注目していない。また、角田宏子
「きりぎりす（蟋蟀）」の考察『奈良帝御集』の和歌をめぐって」
（『芸術工学』2022）神戸芸術工科大学、二〇二二年）は、平安期の詩
歌における「蟋蟀」や「きりぎりす」の詠まれ方を、白詩を主と
する唐詩と比較する。角田論は「機織り」との関連に着目した点
で本稿と重なる部分はあるが、作品解釈や調査対象の点で立場に
違いがある。

（5）なお「蜻蛉」は平安朝漢詩に用例がみえず、対応する和語「こ
ほろぎ」も平安期の和歌にはみられないため、本稿では言及しな
い。

（6）平安朝および六朝／唐詩を対象としたのは、日本漢詩でま
った量の用例が得られるのが平安期であり、中国でそれに対応
する時代が唐代であることによる。なお、本稿では専ら表現の問
題を扱うこととし、先行論の議論する生物学上の問題には立ち入
らない。

（7）『文選 附考異』（藝文印書館、一九八九年）

（8）『藝文類聚 下』（中華書局、一九六五年）

（9）『玉台新詠 上』（新釈漢文大系（明治書院、一九七四年）

（10）『修培基箋注』孟浩然詩集箋注（上海古籍出版社、二〇一〇年）

（11）『庾子山集注』（中華書局、一九八〇年）

（12）岡村繁『白氏文集』（新釈漢文大系（明治書院、一九九八—
二〇一八年）、以下同

- (13) 韓泉欣校注『孟郊集校注』（浙江古籍出版社、二〇一二年）
- (14) 中華書局本（底本・商務印書館藏明刊本）『文苑英華』影印は「恐」に作るが、「雁」との対であることから、『張司業集』四庫全書 および『全唐詩』に従い「蛩」に校訂した。
- (15) 『文苑英華』第二冊（中華書局、一九九五年）
- (16) 「蜚」語群の声は、元々『藝文類聚』や『文選』古詩十九首其七の「促織」に対する李善注では「機織りを促す」とされたが、ここに挙げた唐詩の例をみると、「機織りの音そのもの」のようにも聞かれたことがわかる。注4柳澤論が「鳴き声が機を織るかんだかく悲しげな音である」という通りである。
- (17) 『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（日本古典文学大系）（岩波書店、一九六四年）
- (18) 小島憲之『田氏家集注 卷之上』（和泉書院、一九九一年）
- (19) 「絡緯」と対になる第三句の「蟬蛩」は本来ひぐらしを指すが、ここでは「絡緯」とともに「蜚」の言い換えとして扱われていると判断した。
- (20) 『群書類従』本「何憐」では「どうして憐れを感じるだろうか」の意となり七句目と矛盾する。小野泰央／中屋健治／津田潔『天徳三年八月十六日闕詩行事略記』訳注稿（五）「〔群馬高専レビュ』17号、一九九八年）の注釈も「この句法は未見」として不審を示し、「何」を強調、感嘆を表す副詞とすれば、なんと心惹かれることよ、の意。」と補足する。『日本詩紀』には「可憐」とあり、その場合「鳴き声を聴くと感慨が起きる」という詩全体の内容に相応しいといえる。そのため『日本詩紀』に基づき「可」に校訂した。
- (21) Japan Knowledge 版『群書類従』、以下同
- (22) 小野泰央／中屋健治／津田潔（注20）によれば、大阪府立中之島図書館本では「月景」だが用例は殆どなく、『群書類従』本「月影」のほうが正しいかもしれないという。ここでは『群書類従』本にしたがった。
- (23) Japan Knowledge 版『群書類従』
- (24) なお、注4角田論は白居易「寓意詩五首」の「促織不成章」の句と菅原清公「賦得絡緯無機（応制一首）」を比べ、「（促織不成章）」を、同テーマである「絡緯無機」と比較する時、やはり異なる。上代漢詩（清公詩）が、さらに言葉を加え、あるいはまた、なぜそうなのかと見立てに言及するような詠み方をするのに対し、白詩は言及しない。」と述べる。だが、前者の主題は不実な人付き合いへの失望で、「促織」は例えの一つなのに対し、後者は絡緯に機織り機が無いことを題とするため、虫の機織りが有名無実であることへの言及の詳しさが異なるのは自然と考えられる。また、名に反する実態への注目は、「蜚」語群を詠む作品では両者の他に例が少ない。そのため、ここでは相違よりもむしろ発想の共通性に目を向けた。
- (25) 家持集所収歌には家持作ではない平安期の歌も含まれる。引用歌は万葉集になく、「つづりさせ」の語も万葉集にはみられないことから、平安期の歌と判断した。
- (26) 「冬」部だが実際には秋の歌が収められ、末尾に「ここまで秋といへり」との注記がある。
- (27) なお、徳植俊之『機織り虫』攷—漢語撰取の「様相」（橘の会『小論』10、一九九六年）は、「はたおる虫」と「促織」「絡緯」の關係について、虫が「機を織る」のか「機を織ることを促す」のかという表現の差異に着目し、「促織」の字義は「織るを促す」

だから「つづりさせ」と対応し、「絡緯」の方こそが「はたおり」の原語だという。しかし、『新撰万葉集』が「はたおり」に「促織」の字をあてることや、古辞書に「促織」を「はたおりめ」と訓じる旨の記述があることから、「促織」と「はたおり」が強く結びつくことは明らかで、徳植論のいう対応関係には首肯しがたい。ただ、虫自体の行為として詠むか、人の行為を促す声として詠むかという点は、先述の日本における「蚕」語群と「織」の組合せの特徴とも関わり検討の余地がある。

(28) 日本文学 Web 図書館の語彙検索で、『新編国歌大観』を対象に、時代を平安時代に設定し「つづりさせ」「つづりさせ」「つづれさせ」「つづれさせ」「はたおり」「はたをり」「はたおる虫」「はたおるむし」で検索した。

(29) 日本文学 Web 図書館の語彙検索で検索対象をすべてに設定し、「きりぎりす」「きりぎりす」と「おる」「おり」「はた」「ころも」のいずれかを含む歌を検索したが、「きりぎりすが機を織る」と詠む歌はみられなかった。

(30) ただし、漢詩のなかでも清公は、「思蟲寧有憶、誰為織寒衣——絡緯に思ひがあるわけではないだろうに、誰のために冬服を織るのか」、また「正成如可借——絡緯の織る衣が出来上がって借りることができたならば」といい、実際に「衣服を織る」ことに関連づける。また「織られる冬服」「縦糸と横糸」「杼と機」と、機織りに関係する道具や物品を複数登場させることにより、想像上の機織りの場面をより詳細に具体性をもって描写する。これは他作品とは異なり、聴覚の比喩にとどまらず、虫が「機を織る」という行為をより具体的に描く。この点で他の詩よりも和歌に近いといえる。

(31) 注4柳澤論では「平安／鎌倉期の和漢文学では、「きりぎりす」が「蚕」「蟋蟀」と表記されること、(中略)物思いの辛さを一層かきたてるような切々とした悲しい声で鳴くこと、が示されている。

(32) 『菅家文章 菅家後集』（日本古典文学大系（岩波書店、一九六六年）

(33) 本間洋一『類聚句題抄全注釈』（明治書院、二〇一〇年）、以下同

(34) 本間洋一『本朝無題詩全注釈 三』（新典社、一九九四年）

(35) 「怨」の意味については、松浦友久「詩語としての『怨』と『恨』——聞怨詩を中心に——」第五章（『詩語の諸相——唐詩ノート』研文出版、一九九五年）を参照。

(36) 『樂府詩集』（中華書局、一九七九年）

(37) 『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）

(38) 特に⑥は、「蚕」語群の「怨」とその原因としての重陽の行事を描くことに詩全体を費やしており、他の三首と比べても特異である。

(39) 「蚕」語群に対応する和語には「はたおり」もあるが、和歌で「はたおり」が風などの「寒さ」ゆえに鳴くという場合、「風が寒いので衣を織る」の意であることが多く、ここで検討する「寒さを厭う気持ち」を表明して鳴く」発想とは趣旨にずれがあることから今回は扱わなかった。

(40) 『万葉集』における「蟋蟀」の訓について先行論の間でも見解が分かれているが、現在一般には「こほろぎ」とよまれる。しかし、平安期の訓では「きりぎりす」とされていた。本研究は主として平安朝の詩歌を扱うため、平安期の訓に従い「蟋蟀」を「き

りぎりす」の用例に含めた。

(41) 『万葉集』で、生物が鳴く理由としての「寒さ」という観点から他の生き物を含めてみても、「上瀬原 河津妻呼 暮去者 衣手寒三 妻將枕跡香（かみつせにかはづつまよぶゆふさればころもでさむみつままかむとか）」（巻十／秋雜／2165「詠蜚」）のようにほとんども妻恋いを題材とし、寒さを憂い鳴く発想はみられない。「寒さを厭って鳴く」という詠み方は十世紀初頭から現れるといえる。

(42) 和歌文学大系（底本：宮内庁書陵部本）は「よる（夜）」を「よそ（余所）」で収録する。

(43) この歌について、和歌文学大系の注は「かる」を「離る」とし、「憂くも」を詠者の心情ととらえて「悲しいことにきりぎりすが（私の庭の）蓬を離れてしまったことだ」と解釈する。その場合この歌もきりぎりすの寒さを厭う心情を詠んではないことになる。ただ、「宿をかる」あるいは「宿かる」という表現は、多くの場合「宿を借りる」つまりある場所に泊まることをいう。そのため、ここでも「きりぎりす」が蓬を居場所とすると解釈して差し支えないと考える。そうすると、下の句全体が「きりぎりす」の心情ならびに行動となり、平安朝漢詩の「きりぎりす」が寒さを避けて植物を住処とするという構図と重なる。

(44) 『万葉集』中の「きりぎりす」の用例数が限られているため全体的な傾向はいえないが、この例は、「きりぎりす」に想定される心情が、憂いや悲しみ、つらさよりはむしろ喜びや楽しみであったことを示すといえよう。

〔引用本文〕

漢詩文の引用元は注に示した。和歌の用例は全て日本文学 Web 図書館版『新編国歌大観』に拠る。

〔凡例〕

書き下し・傍線は引用者による。字体は基本的に引用元に従ったが、一部通行の字体に改めた。引用中の〈 〉は小字注を示す。用例の列挙にあたり丸数字で通し番号を振った箇所がある。『全唐詩』中の「一作」の異文注記は省略した。『万葉集』の引用に際しては、『新編国歌大観』の西本願寺本の訓を使用した。オンラインの文献は最終アクセス二〇二五年八月二十五日。

（こやま・あい か 本学博士前期課程）